

# 震災後の岩教組青年部の 取り組み

—集まろう 話そう みんなの笑顔をとりもどそう—

佐藤 浩

(岩手県教職員組合 青年部長)

2011年3月11日14時46分に発生した東日本大震災により、私たちの生活は大きく変化しました。体験したことのない大災害からの復旧・復興へ向けて立ち向かわなければならない状況になりました。震災発生直後から、岩手県教職員組合（以下、「岩教組」）としてさまざまな取り組みを行ってきましたが、本稿ではその中で私自身が体験したことや感じたこと、実際に青年部長として青年部運動をどのように進めてきたかを中心に紹介します。

## 1. はじめに～発災当時の状況を振り返って～

### (1) 教職員の状況

震災発生当時、ほとんどの教職員は学校で勤務していました。出張に行っていた方や休暇を取得していた方、非常勤の教職員ですでに退勤した方や出勤日でない方についてはそれぞれの地域や移動先で避難をすることとなりました。

### (2) 避難の状況

海に近い場所に位置している学校は、子どもたちと一緒に避難をして、そのまま避難所で一緒に生活することになりました。

海から遠い場所に位置している学校や高台にある学校は、そのまま学校で避難していることとなりましたが、その多くは避難所になっていました。波がおさまるまでの間、孤立状態にあった学校もあり、自治体職員や消防署員等が駆けつけることができず、教職員が中心となって、避難してきた地域の方々へ体育館や校舎を開放して避難所運営を行うこと

になりました。

### (3) 子どもたちの状況

小学校の場合、地震発生時刻は、子どもたちが下校するかしらないかの微妙な時刻でした。地震後は停電になり、校内放送が使用できなかったこともあり、下校し始めた子どもたちに向かって大きな声で叫びながら、すぐに教室に連れ戻すというような場面もあったようです。

年度末の事務作業や卒業式の会場準備などを行っていた学校の場合は、午前授業となっていたため、子どもたちはすでに学校におらず、地域の中で一人ひとりの判断で避難しなければならぬ状況もありました。

一部の保護者は、子どものことが心配で地震直後に学校にやってきて、子どもたちを引き取りにきました。家に戻ろうとして、やはり学校のほうが高台なので安全だと判断して再び家族で避難してきた方や海より遠い親戚の家に向かった方、家にいる家族を迎えに行った方などがいました。その中には、残念ながらなくなった方もいます。「もしもあの時こうしていれば…」後悔の気持ちが教職員を悩ませることとなります。

## 2. 被災地へ思いをはせる

### (1) 安否確認～今までのつながりがなせること～

3月11日から教職員の安否確認を行いました。私は、青年部員を中心に仲間の情報を待ちました。発災当時、私は東京の集会に参加

していたため「帰宅難民」となりました。帰る術を模索しながら、知っている方へメールを送り続けました。連絡がつくまで毎日メールしました。毎日メールを送った理由は、仲間が生きてほしいという切実な思いと元気づけられたらという願いとともに、携帯電話が通じるようになったときにすぐに見てもらうためです。毎日送り続け、常に新しい受信メールに私の名前を残すことが大切だと思ったのです。

翌日から内陸部を中心に電話がつながるようになり、それぞれ連絡が取れた仲間の情報を交換しながら、青年部員の安否を確認していきました。

並行して沿岸部の支部の青年部長の中には、私たちと同様に支部の青年部員の安否確認をしていた方もいました。内陸部へ避難していく仲間に話しかけながら情報を収集して表にまとめて、後日FAXで岩教組本部に送信してくれました。電話が通じなくとも同じような思いで行動する仲間がいたことに感動したことを覚えています。

最後まで安否確認が大変だったのが、非常勤講師の方々です。1の(1)でも述べましたが、その当時職場にいなかった方々は、職場でも連絡がとれなくなっていました。そこで、各支部で連絡のとれる仲間を探して、直接連絡をとってもらったり、メールをして返信を待ったりしてもらいました。そして「いつ、誰が、どのような形で確認したのか」を報告してもらいました。普段から同年代の臨時採用教職員にも声をかけ、職場をこえたつながりをつくってきた青年部の運動が大いに役立つ結果となりました。

## (2) 分会訪問と情報収集

岩教組では、震災発生直後から各職場へ食糧や衛生用品などを運びながら、各職場の安否確認や教職員の置かれている状況、学校の被災状況などの情報を収集しました。各分会(職場)で得た情報をもとに教職員の生活支援と学校の復旧・復興のためにどのようなことを行っていくべきかなどを協議し、方針を立てました。

発災から1週間が経過するころになると、自治体やボランティア団体、自衛隊などが避難所運営を行い、生きていくために必要な物資

がそろい始めました。避難所によっては支援物資が過剰に届き困っている場所と、全く物資が届かず自分たちで物資を集めている場所など各避難所で差が出始めました。

必要とされる避難所に必要な物資を届けていかなければなりません。各分会から収集した情報を正確に分析し、その先を読みながら支援物資を調達する創造力が試されました。調達に時間がかかり、必要な時に必要なものをすべて支援できたとは思っていませんが、少なからず「岩教組から支援物資としていただいた電動自転車、すごく助かっています」という組合員の声があるのも事実です。

## (3) 行動すること

青年部でも、(2)で情報収集したことをもとに行動しました。4月2日(土)に釜石支部(釜石市、大槌町)のある釜石教育会館の復旧作業を行いました。釜石教育会館は、2階まで津波が押し寄せた所です。沿岸部に住んでいる青年部員は避難所運営や自分の生活再建のため忙しいうえに、教育会館の復旧作業を行うことは大変だと考えました。少しでも休んでもらえるようにと内陸地方に住んでいる青年部員に呼びかけ、清掃活動を行うことを企画しました。

呼びかけ期間が短かったことや年度始めの忙しい時期に重なったことなどから参加者は少ないと予想していましたが、28人も集まり非常に驚きました。

復旧作業を行った当時、釜石教育会館は電気・ガス・水道が一切使用できない状況で水が足りなくなったり、トイレにわざわざ車で移動したりと不便なことばかりでしたが、参加者は皆もくもくと作業を行いました。

壁や玄関の修復などを経て、釜石教育会館は復旧しました。私たちの作業がどれだけ貢献していたかは実際のところはわかりません。しかし、支援したいという内陸部の仲間の思いをつなぎ行動できたことは運動として価値のあるものだったと思います。また、たいした作業でなくても、県内の青年部員が結集し復旧作業にいち早く駆けつけたことにより、釜石支部の仲間を元気づけることができました。

### 3. 集まろう 語り合おう 支え合おう

#### (1) 岩教組青年部定期大会での議論から

5月ごろになると、学校が再開し始めました。しかし、他の学校や公共施設に間借りした学校、一部の教室や体育館を避難所として開放したままの学校、校庭のほとんどが仮設住宅で埋め尽くされている学校など、今までと異なった環境での学校再開となりました。

そんな中、今年度の青年部の運動方針を決める定期大会を行うこととなりました。当初は、定期大会の日程を延期することも考えましたが、沿岸部の仲間から「毎日異様な光景を見ながら生活している。気晴らしに盛岡に行きたいので、日程通りで構わない」との心強い後押しを受け、2011年5月7日に岩教組青年部定期大会を開催しました。どのような話し合いになるだろうかという不安もありましたが、できるだけ多くの仲間の声を聞こうという思いで大会を迎えました。

予想よりも多くの代議員が出席し、大会は成立しました。大会の始まる前や休憩時間には至る所で仲間に語りかけ、お互いの状況を交流していました。今だから思えるのですが、情報が寸断され、それぞれの職場の学校再開に奮闘していた教職員は、他の職場で働く仲間の状況を交流できずにいました。こんな時だからこそ、仲間と会いたいという気持ちが強くなり、定期大会に参加しようとする仲間が多かったと考えています。

定期大会の議論の中では、多くの仲間が東日本大震災に関わる議論をしていました。教育復興を担う教職員の重要性や前述した釜石教育会館の復旧作業など、さまざまな視点で語られました。その中でも、賛否が分かれたのは、例年行ってきた集会等を従来通り行うかどうかでした。5月という時期は、内陸部では自粛ムードが徐々になくなりつつあり、むしろ被災者を勇気づけるためにさまざまなイベントが行われるようになり始めた変わり目のあたりでした。

最終的に今年度の運動の方向性を決めたのは、釜石支部の仲間の議論でした。

釜石支部は今回の震災で大きな被害を受けました。そんな中ですが、4月の下旬に釜石支

部の青年部で集まることができました。生徒を失った悲しみや、家族を探して歩く時の辛さや、被災した側ではなくて被災した方を支える立場としての考えや、遺体安置所となっている場で学校を始める不安や、それぞれの抱える不安を話すことができました。話したことですぐに解決というわけにはいかないですが、話して今の状況を分かち合ったことで心の居場所があること知り、安心感をもつことができました。集まって話すことが大切だと感じたので、青年部での取り組みでもこれからも「集まる 話す つながる」を大切に活動していきたいなと思います。いろいろな活動がある中でもJOIN-USや青年部の素晴らしい活動があるので、今年度もぜひ開催して、話す場、つながる場、集まる場をつくってほしいし、盛り上げていきたいなと思っています。これからもがんばりましょう。

この討論から、集まれる仲間が集まり、徐々に集まれる仲間を増やしていき、みんなで支え合いながら震災を乗り越えていこうという思いを確認することができました。そして、従来通りの取り組みを行うこととなりました。

#### (2) みんなで集まり語りあおう

##### ～JOIN-US2011～

釜石支部の仲間の声をもとに実際に取り組みを進めていくこととなりました。とはいえ、具体的に進めていく上でさまざまな議論が必要となってきました。岩教組では、青年層の組織強化拡大をねらいとして、青年部が中心となって企画運営を行う「JOIN-US」というイベントを毎年7月末に開催していました。従来であれば「リゾート地の安比高原でみんなとわいわい楽しもう」とか「県内の仲間と盛り上がるよ」などという声かけをしてきました。しかし、今年度の場合はそれができない雰囲気でした。どのようなねらいで行っていくか青年部常任委員とJOIN-US実行委員の中でさまざまな議論を繰り返しました。

この当時は、「がんばろう岩手、負けるな岩手」というスローガンによって、自ら被災しながらも、目の前の子どものために働き、弱音を吐けない職場になっているという、報道では伝わってこない仲間の声が多く聞こえ



てくるようになってきました。そうした声を受けて、このような状況だからこそ、今まで積み重ねてきた、みんなで集まり、語り合い、笑顔をとくさん生み出していく運動をさらにすすめて、「日常からちょっと離れて安比の自然にいやされるようなJOIN-US」、「仲間に来て元気がでるJOIN-US」、「笑顔を取り戻すJOIN-US」というような方向性で行うことにしました。

結果的に例年と同じくらいの参加者数での開催となりました。象徴的だったのは、2日目に行った職場交流会でした。時間の許す限り今までの働き方や職場の様子について、おおいに語り合いました。震災発生から学校再開までの様子だけでなく、過度な節電対策に困惑する仲間、休みたたくても休めずにいる仲間の声を聞くことができました。

結果的には、たくさんの仲間が集まる機会を持つことで、普段子どもや職場の仲間の前では言えない「疲れた」と言える「心の居場所」ができたと思っています。

### (3) 常に思いを語り合う

JOIN-USで集まること、語ることの大切さを各支部が実感できたと思います。各支部では、さらに定期的に集まり、仲間の声を聞くことを重点的に行ってきました。下閉伊支部(宮古市、山田町、岩泉町、田野畑村)や釜石支部の青年部では定期的に常任を開いて状況交流しています。気仙支部(大船渡市、陸前高田市、住田町)では、住居が離れ離れになりなかなか集まることができませんでした。

しかし、釜石支部が声をかけ、釜石教育会館で気仙・釜石支部青年部が合同開催で教育研究集会を行うなど、徐々に集まるようになってきています。物理的な距離や市街地の被災状況によりなかなか集まることができなくても、集まって語り合おうという気持ちは忘れずに取り組んでいます。

## 4 おわりに

### (1) 一人ひとりの思いを大切に

先に述べましたが、震災発生当時に私は東京にいて帰宅難民となっていました。そのころから内陸部で震災の影響があまりなかったところにいた当時の青年部副部長と、今後の

青年部の取り組みを協議していました。「募金をするか?」「支援物資を集めるか?」「ボランティアはするか?」などアイデアを出し合いましたが、青年部だけでできることは限られていて、そのほとんどは計画倒れでした。

そんなときに考えたのは「青年部だからこそできること」でした。それは、青年部運動と同様に、仲間の思いに寄り添い、多くの仲間の声を聞くことでした。今までのつながりを元に様々な仲間の安否を確認し、そのたびにそれぞれの状況を聞きました。

まだ、集まれていなかったり、まだ集まりたい気持ちになれなかったり、集まっても自分の思いを素直に話せる状況でなかったりと、一人ひとりの状況や思いは違います。一人ひとりの状況を把握しながら、笑顔を取り戻せるようにこれからも支え合っていきたいと思っています。

### (2) これからが労働組合の出番

震災以前から教育現場には、さまざまな教育課題が投げかけられて苦しい状況でした。そこに震災からの教育復興という大きな課題が課せられました。被災地の教職員には、過剰な期待がのしかかっています。「復旧・復興のためにがんばらなければならない」と自分に言い聞かせて疲れている体を無理に動かし働いている教職員もいます。

1年間、見渡せば津波の爪跡が見える環境で生活してきました。住居が被災した教職員は、職場から帰ってもしっかりと休める環境ではありません。

メンタルヘルス対策や教育環境を早急に整備すること、雇用創出などの地域経済の早期復興など、私たちが私たちと仲間のために声をあげていく必要があります。

復興元年と言われる今年は、「労働組合でしか取り組めない課題」が多く存在します。これからが労働組合の出番です。集まり、話しながら、みんなの笑顔をとりもどし、安心して働ける環境をつくっていききたいと思います。